

【演題分類】06 医薬品情報

【演題】小児薬用量に関する情報収集方法の検討

○松谷 春花<sup>1</sup>、石原 奈央子<sup>1</sup>、齋藤 あゆみ<sup>1</sup>、門倉 史枝<sup>1</sup>、磯元 啓吾<sup>1</sup>、藤原 康浩<sup>1</sup>、  
垣尾 尚美<sup>1</sup>、  
合田 泰志<sup>1</sup>

兵庫県立こども病院 薬剤部<sup>1</sup>

【目的】当院では正確かつ効率的な処方鑑査を行うため、添付文書と「新・小児薬用量 改訂第9版（診断と治療社）」（以下、「新・小児薬用量」）等の情報に基づき小児薬用量一覧表を作成・活用している。しかし、必要な情報が得られない薬品があり、Von Harnack 表等の換算式で対応している。今回、当院採用薬における小児薬用量情報の収集状況を調査すると共に、収集方法を検討した。

【方法】2021年3月現在の当院採用薬について、添付文書及び「新・小児薬用量」を用いて小児薬用量の情報が得られるか否かを調査した。なお、電解質輸液や軟膏等の用量情報が不要と考えられるものは対象から除外した。また、情報収集方法の検討を行うために、2020年に薬価収載された新有効成分及び新再生医療等製品を対象とし、国内添付文書、海外添付文書またはPub-Medの検索により小児薬用量の情報が得られるか否かを調査した。

【結果】当院採用薬について、添付文書のみの場合は48%、「新・小児薬用量」を併用した場合は78%の薬品について情報が得られた。また、新規薬価収載品については、対象40薬品中、情報が得られたものは14薬品(35%)であった。

【考察】添付文書及び「新・小児薬用量」のみでは約2割の採用薬については情報が得られなかった。一般的に情報が得にくい新規薬価収載品において、海外添付文書や学術論文から一部情報を得られたことから、新たな情報源として活用できることが示唆された。一覧表作成手順を見直し、添付文書及び「新・小児薬用量」から情報が得られなかった場合の収集手順として海外添付文書情報を取り入れ、一覧表の充実化を図った。

【結論】小児薬用量一覧表の情報不足状況を把握し、情報源を広げることができた。用量に限らず、適切な情報収集に今後も務めていきたい。